プ　ロ　グ　ラ　ム
曲　目　解　説

第1部

リュート組曲第3番より　　プレリュード　ガボットⅠ・Ⅱ　　（J.S.バッハ）

ヨハン・セバスチャン・バッハ（1685〜1750）は自分ではリュートを弾かなかったようですが、S.L.ヴァイス（1687〜1750）らの影響を受けて数曲のリュートのための作品を残しました。今日演奏するリュート組曲第３番 BWV995 は無伴奏チェロ組曲第５番 BWV1011 の編曲です。このプレリュードはフランス風序曲と線的対位法によるフーガからできています。ガボットⅠはフランス起源の軽く跳ねるようなリズムを持った舞曲です。ガボットⅡで三連符による変奏の後ガボットⅠが繰り返されます。

魔笛の主題による変奏曲　Op.9　　（F.ソル）

フェルナンド・ソル（1778〜1839）は若くして故国スペインをはなれイギリスに渡りました。おそらくその地で当時頻繁に上演されていたモーツァルトのオペラ「魔笛」を観て触発され、この作品９の変奏曲を書いたとおもわれます。オペラの幕開けを想像させる序奏、第１幕で歌われる三重唱を元にしたテーマと５つの変奏そしてコーダが続きます。

「吟遊詩人の調べ」Op.13より
「マルヴィーナへ」「不安」「夕べの歌」　　（J.K.メルツ）

ヨハン・カスパール・メルツ（1806〜1856）は現在のハンガリーにあるプレスブルクに生まれ、その後ウィーンに出て活躍しました。「吟遊詩人の調べ」は 30 曲からなる作品集で、シューベルトやリストらロマン派の作曲家の影響を感じさせます。マルヴィーナはおそらく女性の名前です。「マルヴィーナによせて」とも訳せます。「不安」” Unruhe"は落ち着かない様子をあらわす言葉でもあります。「夕べの歌」は沈み行く夕日に映し出される山々や木々のシルエットを想像させます。

《　　休　　憩　　》

第2部

スペイン舞曲第５番　　（E.グラナドス〜 M.リョベート）

エンリケ・グラナドス（1867〜1916）は I.アルベニス（1860〜1909）とならんで、自作に自国スペインの民族的な要素を取り入れた作曲家です。どちらも優れたピアニストでもあり、多くの曲がギターに編曲されています。グラナドスのスペイン舞曲第５番は「アンダルーサ」の別名を持ち、その哀愁を帯びた曲調から良く知られ広く演奏されています。

タレガ讃歌：ガロティンとソレアレス　　（J.トゥリーナ）

アルベニス、グラナドスに続き、スペインの民族色をより強く反映させた作曲家に、マヌエル・デ・ファリャ（1876-1946）とホアキン・トゥリーナ（1882-1949）がいます。彼らはギターのオリジナル曲も書きました。　トゥリーナのガロティンとソレアレスは「タレガ讃歌」とも呼ばれますが、フラメンコ音楽の影響を強く感じさせます。

スウェーデン民族組曲
前奏曲、結婚行進曲、婚礼のワルツ、子守唄、後奏曲　　（U.G.オースルンド）

ウルフ・G・オースルンドはスウェーデンのギタリストであり作曲家です。「スウェーデン民族組曲」は 1964 年に出版されました。前奏曲、結婚行進曲、婚礼のワルツ、子守唄、後奏曲でできていますが、婚礼にまつわるタイトルにかかわらず曲調が暗いのは北国の長い冬が関係しているのでしょうか。

バーデン・ジャズ組曲　　シンプリシタス・子守歌・サンバ風ロンド　（J.イルマル）

プラハで生まれたイルジ・イルマル（1924〜）の「バーデン・ジャズ組曲」は、彼が敬愛するバーデン・パウエル（1937〜2000）に捧げられました。　第１楽章シンプリシタスの後半はボサノバ調で、子守唄である第２楽章をはさんで第３楽章はサンバ風ロンドでと、ブラジル音楽のスタイルで書かれています。

曲目解説　原善　伸

プ ロ フ ィ ー ル

原　　善　伸　　Yoshinobu　Hara

ギターを奥田紘正、K.H.ベットナー、佐々木忠の各氏に師事。1973 年渡独。1976 年ドイツ国立ケルン音楽大学首席卒業。ブレーメン音楽院（現大学）講師を勤め 1979 年に帰国。以後国内外で広く演奏活動を行う。2001〜2008 年ドイツ・ヴァイカースハイム国際音楽祭講師を勤める。現在までに「原善伸ギターリサイタル」Ⅰ 〜 Ⅴをはじめフルートやヴァイオリンとの二重奏、ギター四重奏などの CD、またギター名曲演奏法解説のビデオ、ギター伴奏によるヴァイオリン名曲集などが出版されている。現在、洗足学園音楽大学および大学院教授。また日本大学芸術学部や熊本大学教育学部の非常勤講師も勤めている。

奈良労音では昨年に続き２回目のコンサートとなる。

原善伸のブログ（http://harayoshinobu.blog.ocn.ne.jp）で彼の日常や音楽活動を知る事ができる。